

ミオヤの光 偈文の巻

眺る人の心にぞすむ……………一

慈悲の面影……………四

安心……………五

一心十界……………六

大みおや……………八

歌讀如來の光……………十一

八相應化の頌……………二五

一心十界の頌……………三七

ながむる人の心にぞすむ

聖典に、如來の光明は遍く十方世界を照して、念佛の衆生を攝取して捨て給はず、との文意を吾が宗祖明照大師は、『月影の至らぬ里はなけれども、ながむる人の心にぞすむ』との道詠を以て、宗教信念の消息を漏らし給へり。(斯の本の表紙の圖は、此道詠の意を表したのであります)此道詠は宗教の眞髓を包含しあれば、深く汲み能く味ひて、大宗教家の心悟に倣ひて、自己の信念を養ひ給へ。道詠の意は、中秋清宵澄々たる天に皎潔き月影は、地上に照り渡らぬ隅もなければ、唯注意を拂ふ人の心にのみ影は清くもとどまる如く、宇宙心靈界の彌陀の心光は、常恒に輝きて照らさぬ隅もあらねども、唯信念ある人の心にのみ靈應は宿り玉ふなれとの意である。斯の道詠の『ながむる人の心にぞすむ』とのすむといふことに、深意あることゝ存せられます。世の人々よ、宗教の眞髓を得んと欲せば、此のすむといふことに參じて

一

眞意を求め給へ。元より道詠の意は、宗教の眞髓たる心情と如來の心光と合ふことをのべ給ひしなれど、一心に念佛するときは、凡夫の心も自づと澄み渡るてふ義もあり。古人が淺ましき愚人悪人にて、澄みたる月に我をなげうらて想を天に住まひれば、萬邪皆忘れて清きになる如く、一心に念佛して眞實天に照りたる如來の光明に、自己の心情を投する時は、佛心の光明に照されて凡夫の煩惱も、自づと晴れ、いつしか菩薩心となるべしと、一心に念佛して自づと佛心と相應する時は、凡夫の心もやがて澄みて聖者と同心とはなるのである。

又念佛心には佛心と相念して離れざる義あり。月や我我や月と別かぬまで想を如來の光明にすましむれば、我が心念はみ空さやかに照すあなたに在れども、如來は還て我が心中に入り給ふ。

こゝを善導大師は、衆生佛を憶念すれば佛もまた憶念し給ふ、佛心と衆生心と親密の交渉は、彼此相離れざる最も親しき縁あるとの給へり。佛を念する人の心には、如來の靈應常に宿り給ふ。

今此の圖は、如來の光明に清められ、如來が其心に在ますてふ人の心を表はしたものである。觀世音菩薩は、彌陀の光明に靈化せられたる人、即ち清められたる人の代表者である、觀音の寶冠に彌陀を戴けるは、即ち常に彌陀を憶念して、心に捨離せぬことを表示したのである。

然らば、念佛して常に彌陀が其の心念に在ます時は、即ち觀音の同胞である。されば觀經に念佛する者は、人中の白蓮花なれば觀音勢至は、常に勝友に爲り給ふと録されてある。

我宗祖明照大師は、實に是れ活ける觀音にして又大勢至である。されば其當時の人も形を見れば法然房、實を言はば彌陀如來と稱へられしにても知るべきである。彌陀を心念に宿せる者は、即ち觀音勢至というべければなり。故に吾人は宗祖を活ける觀世音大勢至と仰ぎ奉る、宗祖は吾曹に模範を示し給へり。されば吾曹は、宗祖が常

三

に彌陀を念せし如くに、諸人も常に彌陀を念じ宗祖の中心に彌陀の在せし如くに、彌陀吾が心情に在はすことを做はんと欲するのである。

彌陀の光明に充されたる心を表はしたる、表紙の圖の如き心の生活に入らむと欲する諸賢は、斯道を求め給へ。

慈悲の面影

大聖釋尊の曰く阿彌陀佛眞金色の身圓光徹照し端正無比なるを想念して心眼の前に在り。聖善導曰く行者等一切の時處晝夜に常に此想を作せ行住坐臥にも亦此想を作せし。

聖文殊普賢の曰く面たり彼の佛阿彌陀を見上り即ち安樂刹に往生することを得ん龍樹曰く面善は圓淨にして満月の如く威光は猶し千の日月の如し聲は天鼓俱支羅の如し故に我は彌陀尊を頂禮す聖善導曰く彌陀身心は法界に遍し衆生心想の中に影現す乃至依心起想して眞容を表せよ又曰く念佛して念々に見佛の想を作せよ 聖源信欽して眠ば夢覺れば現束の間も忘れ難きは彌陀の面影 聖法然詠じて我は唯何口か佛に葵草心の妻に繋ぬ日ぞなき 先聖既に凭の如し我ら佛の嬰兒として御親の慈悲の面影を憶ふ計り樂きはなし。

安心

教祖釋尊此世に出で給ひて宗教の眞理を教へ給へり。宗教とは宇宙に絶対的に尊き靈格が存在して之に歸命信賴する衆生を攝め取りて永遠の靈福を與へ給ふの教なり。即ち經に無量壽如來の威神光明最尊第一にして諸佛の光明よく及ばざる所この故に如來には無量光等の十二の光名ましませり若し人ありて斯の靈光に觸るゝ者は心の垢は消滅し身と意と共に柔軟に圓滿に歡喜と平和とに充たされ聖き善き心生せんと言き給へり。實に彌陀は靈界の太陽なり例へば太陽の光に由りて地上の生物が化育する如く

五

に如來の光明に依つて衆生の心意は靈化せらる。然して衆生が如來の聖意に應はしめんと欲せば至心に如來を信愛し靈國に生れんと欲して一心に念佛すべし。然る時は衆生の佛性の現は如來の慈光に孵化せられ生死の凡夫は永生の佛子と更はり闇黒より出で、光明の生活と成らん。されば經に若し念佛する者は人中の白蓮華觀音勢至は其勝友と爲り當に成佛すべき諸佛の家に生れたりと讃めたまへり。

一心十界の解

心具十界とて衆生の心に十界の性を悉く具ておるが各自の生涯の業に由つて十界の中の何れかを造り出すものとす。經に心は工なる畫師の如くに鬼をも佛をも造り出すと示し玉へり。各自に十界の性を有つておる故縁に觸れば鬼の如き恐ろしき心を起こす是地獄の性にて饑餓嫉妬は餓鬼の基、愚癡横着は畜生の因、虛榮憍慢は修羅の心、仁義禮智は人間の性、慈善公德の分あるは天上の性、又た眞理を聞けば悟りたれと思ふは聲聞の性、生死を諦めたいと思ふは緣覺の分である、平生無佛論者が絶待の場合に自から稱名の發するは是れ佛性あればなり。而して永く闇黒の獄火に燒かるゝも永遠の光明界に登るも心一つの向け様による。諸賢よ君の心意は十界の中に何れを造りつゝあるかを自ら反照し玉へ、可惜人生を曖昧の中に葬むる如き愚に倣ひ玉ひそ。佛教は衆生本具の佛性を開きて永遠の生命と圓滿なる聖き人とに爲すにあり、此が捷徑は乙の圖解に示さん。

一心十界

法身如來より分け出し衆生の心に悉く六凡四聖十界の性能具さに備はれり。心一が爲す業の善惡迷悟の因縁により淨穢苦樂の果報び十界の依正と現はるれ激苦間なき地獄は極惡邪見の報ひとや飢と渴きの餓鬼てふは肉欲我欲罪による互に啗合ふ畜類は愚癡横惡なる業に闇淨就合ふ修羅道は驕慢り勝負を好むにぞ人道を正しく行ふは人倫資格たる人ぞかし博く愛して最高き行ひなるは天つ人

七

善悪ともに三等わけ 苦樂を受ける六の道 無明の闇に彷徨る 流轉生死の凡夫なり
 四諦を悟る聲聞は 神通自在の身を證し 無明生死の夢醒て涅槃を得は辟支佛 智慧
 と慈悲とが備はりて 二利兼行は菩薩にて 因圓果滿究竟て 無上覺位は佛二なり
 二乗の解脱は權にして 佛陀の涅槃のみ真理 本覺真如に歸ては 始本不二の身とな
 らむ

大みをや

如來は衆生の慈父なり 三身一如に在して眞天地萬を統たまふ 徧一切の法身と清
 淨界に在ては 光明攝化ふ報身と 迷の衆生に應ては 教を垂ます應身なり 天地萬
 の備へもて衆生を育む目的は 我らか心を救靈てぞ 竟に佛に成す爲と 彌陀の慈悲
 いと深く 苦毒に沈む子らがため 超世本願を示さんと 光明名號を顯はしぬ 光明
 遍く照しては 念佛衆生を攝めます 光に三垢も清められ 身をも心も安らげく 平
 和と歡喜に充されて 靈き心と生ぬれば 此に居ながら極樂の 聖衆の員に數へらる
 彌命の終には眞實報土に生るなれ 金銀 マニ眞珠 瑠璃寶石の寶樓に 父子相迎の
 朝には 菩薩の功德具はりて 無上菩提の昏には 十方度生こと極なけむ

勸告

諸賢よ斯十界の鏡にて我心を照し 己か頭腦は現何の方面に向て發達し在やを點檢
 て三惡六道の心の非なるを自覺し一心に念佛して如來の光明に攝められんようにまた
 佛の光の裡にますく向上むべき様に佛の本願力を仰ぎ玉へ是れ此圖を頌つ所以なり

讃歌

如來の光

に 調 四 分 四

3 3 5 5	3 3 2 3	5 5 7 5 3	2-0
あをぐも	かしこき	あみだ そ	ん
7 7 1 6 7	3 3 2 2	7 7 2.7	6-0
すべての	ほとけと	かみがみ	と

はしがき

ア、讃むべき哉如来の光、されば一切の佛陀は悉く讚嘆し諸の聖者は皆稱揚すと誠にゆるあり是諸々の佛陀賢聖の本源なればなり。世に此光ほど尊きものなく、若し世に此光ならんか天に太陽なきと同じ世は闇黒なり。喩は太陽に光熱化の三線ありて明と暎と物を化育なす能ある如く、如来の智慧慈悲靈化の光は迷を破し悟を開き苦を抜き樂を興へ惡を廢して善に進むの力を興へ玉ふ其徳無量焉。そのぶべけむ。諸の賢者よ讃よ稱えよ如来の光を。而して此光を種て清き人となり諸共に光の生活を得まほしきにぞ此讚歌を頒布するものなり。(せんなしるす)

如来光明歎徳章

佛阿難に告たまはく、無量壽如来の、威神光明最尊第一にして、諸佛の光明及ぶこと能はざる所なり、是故に無量壽如来を無量光佛無邊光佛無對光佛徳王光佛清淨光佛歡喜光佛智慧光佛不斷光佛難思光佛無稱光佛超日月光佛と號したてまつる、其衆生ありて斯光に遇ものは、三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ぜん、若三塗勤苦の處に在て此光明を見たてまつらば、皆休息を得て亦苦惱なく壽終の後皆解脱を蒙むらん、無量壽如来の光明顯赫にして十方を照耀す諸物の國土に開えざることなし、但我今其光明を稱するのみにあらず、一切の諸佛聲聞緣覺諸の菩薩衆も悉く共に歎譽したる事亦復是の如し、若衆生ありて其光明の威神功徳を聞て日夜に稱説して至心不斷ならば意の所願に隨て、其國に生ずることを得て諸の菩薩聲聞大衆と共に歎譽して其功徳を稱せられん、其然して後佛道を修得するに至て普ねく十方の諸佛菩薩に其光明を歎せられんこと亦今の如くならん、佛の言く我無量壽如来の光明威神の觀々殊妙なることを説んに晝夜一劫すとも尙いまだ盡すこと能はじ

如来の光

佛陀那

仰ぐも長きあみだ尊
乃し生とし活くもの
如来は法則の主に在て
一切諸法の原則なれば
本願攝取ぬの夕日かけ
幸福と光榮に輝やける
無量壽如来の法の身は
聖旨の光を體得ひとは
四智圓かなる朝日かけ
ひかりを破る撫し子の
神聖と正しは嚴そかに
恩寵の母の靈育みには
本覺の宮にりぬれば
無上覺王 寶座にて
聖旨にそむける迷子が
つみの薪と積れるも
塵にまびれし稚な子が
清き光りのみそゝぎに
天うららかに歡びの
逍遙こゝろの樂しさに
さとき光に無明はれて
月の聖容をみまつらば

一切の佛と神がみと
本み本本地にて獨尊とし
天地萬物を統べ攝さめ
權能に係らぬ物ぞなし
歸依かたを照らしては
涅槃のみ國に引接きぬ
眞理の父にましませば
無上法王位を輔處なり
み法の庭にてりわたり
菩提の花は開きそめむ
臨める父の威儀たかく
世嗣の聖子と成ぬらむ
絶對圓滿へたてなく
威神の光りまどかなり
惑と業となやみなる
炎のひかりに焚つきぬ
肉體の感覺は汚るれど
五根淨とは成りぬべし
光りはれたるみ園にて
ときはの春は長閑なり
智見の眼ひらくとき
聖きみむねと悟らるれ

断へぬ光に動機がされ

まず／＼至善に向しては

永夜に眠れる迷ひ子が

難思の光りを感るにぞ

聖なる靈應に交感とき

歡喜きはなく覺はへて

智慧の日月の照らす下

犠牲まつりし此身もて

光の生活

自性もとより淨らげし

聖なる光りを感じれば

如來の慈悲いとふかく

すべての惱も薄らぎて

光のうちの生活しには

きよき光をうかむれば

内には充てる智慧の徳

圓かに備はる人格は

聖旨に背きてぬば玉や

千とせの獄もみ光りに

聖衆の稱え

如來の眞理のみ光りは

神聖と正義の日は明く

よろづの徳は圓かにて

一切の佛陀、聖等も

己を清め他をさそひ

み子の天職を果すなり

召喚のみこゑに驚きて

靈のかけとは成ぬべし

神秘 融合いとたへに

聖きこゝろに更生へる

み子の數なる我われは

聖意に事へまつるなり

肉我の氣質ぞ汚すなれ

聖きみむねも啓示れむ

我らが感情に融合時は

平和と歡喜の極みなく

身をも心もやすらげし

非靈素質もきよめられ

面てはおのすど麗しく

聖意體現はす御相なり

三の開路におつる身の

忽ち明くは爲ぬべし

聖き中にとときよく

智慧と慈悲の月清し

照らさぬ隅も無かりせば

聖徳を稱えぬ者ぞなき

光を獲る因

若ひと如來のみ光りの

日夜不斷て聖名を稱ひ

三昧に神をこらしつゝ

恩寵の光に感合てぞ

有餘の依身を捨すして

いよ、天分を果す日は

光を獲たる果

無爲泥洹のみやこには

金しろがねまに眞珠

舍那圓満のみすがたは

無量のホサツ聖衆は

常樂我淨の靈そのには

我らかしこに到るとき

因圓果滿のあしたには

三身一如の理をさと

願はくば我もろひと

聖き心をおこしては

讚歌の解 如來の光 十五首

獨尊 十方の諸佛神明より一切衆生に至る其本源なくてはならぬアマダ即ち其本地

であるすべてに勝る故に獨尊とす

統攝 天地萬物は悉く自然に支配せらる其自然萬法を統攝するのが即ち法身である

故にすべてが此御權衝にかゝらぬはない

歸趣 如來が終局に攝むる光 之に歸依する者は眞善美の極なるみをやの許に歸る

ことをう是真理の究り諸の善行の極まる處

無量光 天地萬物の本體諸佛神天の本源なれば此真理の光を體得するものは如來の體と一致なるから佛と成ることぞう

無邊光 大圓鏡、平等性、妙觀察、成所作、此四智の光にて人の智慧の眼を開きて一切の真理を自然と覺らしむ

無礙光 神聖の照鑑は明かに行の道を照し正義は惡を捨て善に進ませ惡龍は苦を抜き樂を與ふ是れ靈を育つる父母なり

無對光 如來に攝取同化せられてすべての佛と同じき法身智慧無上の覺位に昇り絕對圓滿の體となるから無對と云ふ

炎王光 人に本心を覆す處の貪瞋などの煩惱と身口意の惡業と身心の苦惱がある之を消滅すること火の物を焼が如である

清淨光 人は眼耳の欲の爲に己を汚す 斯光は其五根を清らかにして玲瓏とし瓊郁としいと清淨なる感性とはなす

歡喜光 人の感情の煩惱をうすらば春風臉躰身も意も悦ばしく平和と歡喜は如來の泉より天地と共に樂しむ麗はしき生活となる

智慧光 我ら心眼なくて神の真理を如見することできぬ斯光は一切の真理を示し諸の神通陀羅尼不思議の佛法を悟達せしむ

不斷光 人の意思を靈化して善き行をなさしむ不斷の政革不斷の精進八億の年々自他共に聖きに進ましむる原動力である

難思光 喚起位初心未だ光明を認識す唯一ら三心五行をもて修養し召喚の光を感じて初めて信心の曉とはなる

無稱光 信念彌すゝみ心光内に薫じ光の靈應を感じ如來心と融合し心の華開き新らしきに更生り初めてみ子の數に入る

超日月光 體現位 已に光を被り聖子として其天職を果すべき爲に身口意に於て其

光榮を實行にあらはす位である

光の生活 潔よく愉快に健全な心の生活

全體人には普通の煩惱即ち肉慾我慾とまた特別に形氣の質の弱點がある此光を得れば本心が發揮し氣質が靈化なり清き心に生れ更り麗しき生活である 一、理に明るくなりよく諦めがつく 二、吉凶禍福共にみな己を磨きて玉はると悦ばしく感ぜらる 三、澁柿の果が乾燥して甘くなる如くに氣質の澁が靈化りて善き人となる 諸君よ凭まで辱なきみたやの光をよそにして自分と苦しき日くらしをなす いかにも不孝の子たるぞざれば求めよみ光を 聖衆の稱え此真理の光は萬徳の本源にて神と曰ひ佛と云ひ此光の發現に外ならぬこれ一切の神と佛との源であるさればすべての佛陀も聖衆も悉く讚たゝえざるはない斯光を得たりしが即ち聖者である斯光をしらぬが凡夫である諸の聖者のように斯光を得てはめ稱えるよき人となり玉へ

光を獲る因

まづ光の真理を聞いて自己の罪惡を自覺し如來の光を信賴し凡てに超て如來を愛し憶念して止まず 聖に生れ更りを望み 又朝夕の拜禮 冥想觀念 請求感謝の稱名 讚美稱頌等をもて信念を養ひ光を憶念して止すば光を發見す是靈の曙にて神秘融合の靈感の心再生にて光を身の行爲に現はすか其華報である

光を得たる果 光の麗しき生活は信念の華にて後無量光明土に至りて真正の靈福を得ついに無明生死の夢醒て大ネハン城に在て眞善美の園には常樂我淨の華開き四智三身の妙果佛々平等に歸するは是光を得たる結果である

斯光に感合よものは

心の三の垢も消滅し

身も意も溫和となりて

平和と歡喜に充され

聖き善き心と

生れ更らん

歌 聖

八相應化の頌

二調四分四

二五

3 3 5 5 | 3 - 2 3 | 5 5 7 5 3 | 2-0
み め く み | よ - か き | を し え ん | し

7 7 7 6 7 | 3 3 2 2 | 7 7 2 7 | 6-0
さん しん い ちによの | のりのみ | は

二四

八相應化の頌

佛 陀 禪 那

二六

大恩教主釋迦牟尼佛
 常寂光土に在して
 無明にまふ子らがため
 靈應を忍土に分ちては
 まづ出せめし雲井なる
 天地よろづの民くさに
 地上に出てはカピラエの
 時をえらみてたましいを
 四月八日のどげさに
 降誕ます聖子の初聲は
 よろづの善事遂てふ
 まどかに具ふる相好は
 學の園にのぞみては
 伎藝の林に遊びては
 天の下を統治めす
 四門の遊びにあだし世の
 人倫とて妹とせの
 いとむつまじき閻門に
 上なき道の得まほしく
 乾陟馬王に御されては
 深山の雲を分入りて
 自からみぐしを除ては

三身一如の法の身は
 萬物を統てをさめます
 大悲三昧のちからより
 八相應化の跡をたれ
 兜史陀の内の宮居には
 めぐみ、露を濕しぬ
 スドダナラージャを父とはし
 マヤの母胎に降します
 ラビの園生の花の下
 天と地とにひいきしと
 シタルダ君とは名けらる
 梵仙アシダを感じし
 五明四吠陀の花をめで
 與義の室にぞ入とかや
 上なき主位に在ませど
 常なき相を悟らるゝ
 ちぎり染にしヤンタラと
 王子のラゴラを擧しかど
 二月七日の後夜に
 密かに宮を出ましぬし
 玉のかざりをぬぎ捨つ
 法の衣に着しがふる

二七

千里のかすみをわけのぼり
 解脱の道を討しかど
 ニレンゼン河の邊りなる
 具さに苦行をつもりては
 金の流に浴みては
 献ぐる乳をうけしにぞ
 ガヤのヒバラの樹の下に
 結ぶ跣踏おごそかに
 天魔羅がふき起す
 みそらさやかに照わたる
 臘月八日の後夜の天
 無明生死の夢さめて
 無爲涅槃の天清き
 慧日の光りはあきらげく
 佛陀の教は上もなき
 ムニの法はいと靈き
 世を救ふこと五十年に
 應化の迹はシシナなる
 まことは久遠實成の
 常に樂しきみ園にて
 ルリ寶石の寶殿に
 相好光明極みなき
 衆生如來を見欲く
 聖きみ名を崇ては

アラ、ウドラの仙人に
 意をえまさで立さりぬ
 縁の草しく園生にて
 六たびの春を經にけらし
 サイナの女ナタバラが
 頃に氣力を回復し
 金剛座のこけむしろ
 三まやの床にひきしめぬ
 百のいかつち群雲も
 月にはさわりあらざりし
 明星ほのかに出し時
 靈の曉日とは成にける
 常住の園は開けにき
 うき世の闇を照すなり
 等正覺をさとらしむ
 ネハンの都に到るなれ
 三輪完全の範をたれ
 鶴の林にかくれしも
 無量光壽に在せば
 金銀マニ寶珠
 菩薩聖衆に圍れて
 利益衆生の邊なし
 欽慕心深ければ
 聖旨の現れ祈りつゝ

三昧に神を凝なは
 早晩か無明の雲はれて
 聖き靈に更生り
 三身一如の月をみん

八相應化の頌の解

禪 那

◎本地法身 教祖釋迦牟尼の本地は三身一軀の如來なり三身とは法身報身應身を云。
 法身は天地物萬の實跡萬物は之より生し亦之に保存せらる。報身はいと美しき處に
 在して麗しき相を具へ智慧と慈悲を以て人類を攝取したまふ如來。應身は報身より
 人格の身を現らはして世界に出て人類を救度ふ佛陀。即ち釋尊は此應身に有る之
 を三身と申すなり。法華に三界は我有其中の衆生は皆我子と説てあるは此三身一如
 にて在が故に其本休は常樂世界に在して大自在の徳をもて迷へる子を回復させむか
 爲に應身を示す。西藏の佛典に「アミダ佛は聖き國に在して大悲三昧より人佛シヤカ
 を化現して人類を救濟ふ」とアミダは是シヤカの本地なり。
 ◎八相應化 は人界に出たるサカムニの一代の歴史にて八相とは生天、下天、托出胎
 出家、降魔、成道、轉法輪、入涅槃なり。
 ◎生天 釋尊が人界に出るに先だちて天のトシダの内院に在て天上と人界とを利生け
 玉ふ此時に善慧菩薩と名づけられたり。
 ◎下天 天に在して下生すべき時と處とを鑑み玉ひ智仁兼備りたる父母と文化己に開
 けたる國とを撰みてカピラエ城の淨飯大王を父としマヤ夫人を母とし一日夫人沐浴
 清潔にしたる清夜に於て夢に白象に乗りし光明を有る聖者が天女にかこまれ伎樂等
 の靈感をえたる時神を母胎に降し玉へり
 ◎降生 夫人いと麗かなる四月八日ラビニ園に遊觀て無憂樹の美しきを牽摘ひとて右
 の手を擧ぐる時靈なる聖子は生れ玉ひぬ正立して自ら聲を擧て天上天下唯我獨尊
 と稱へて光を放ちたまふ。太子生れし日數の吉事並び現したるか故にシタル太子
 と名づけらる譯すれば寂勝て一切の事業遂ると云美し名なり。香山にアシダてふ

仙人あり神通を具て太子誕生の瑞光を感じ遙かに來りて太子の三十二相を具はるを見て涙を流して曰く太子は必ず無上道を成して人類を救度する相を有す我已に老いて其教化に遇ふことをえざるを悲しむと。

●修學 太子幼にして學堂に在て五明四べダ等の高等なる學を修めまた禮樂射御書數などすべて學ぶに成らざるはなし。

●發心 太子は輪王として一天四海を統御し萬乘の君たるべき御身にて天下の祭を自己一人に聚むべき福を有すれども四門の遊びに老病死の相を見てより世の無常にて怙むべきなきを悟り亦異時に於て道人か清肅にして身心調適し威儀の整肅るを見て益々感發して世道の外に心靈解脱の大道あることをさと道心愈々切なりき。

●嬖妻 太子は曾て執析釋氏の女ヤンダラてふ賢婦を娶りいと睦しき閨門の中に於て王子ラゴラを擧しかども大道心切にして殊に印度の民族的宗教及び道徳より發展して人類の宗教と道徳とをもて一切の人類を一慈の下に攝せんとの志願の爲め個人幸福を犠牲にしてついに國と位を捨て大志を遂んとす。太子父の王に白さく夫世間は無常なり生者必滅會者定離實に怙むべきなし願くは我に出家を許し玉ひ我道成就ば不死の門を開きてすべてを度けむと言し上れば父王涙に咽て言こと能はざりき太子は小恵の爲に人類を救度んとの大志は止むべきに非ず。

●出家 年廿九歳四月七日の夜取者シヤノクを具しケンヂヨクてふ馭馬に駕りて竊かに王城を忍び出たまへり。

●入山學道 太子は城を出て曉方にバギヤ仙苦行林に着し馬より下て寶冠璣珠などを解て之をシヤノクに托して姨母とヤンダラに遺りまた珍妙の衣をば脱て自から髪をそりて而してケサを着たまひぬ。

●求道 然しより山林をめぐり諸の道士に就て道を求む即ちアラ、ウドダナなどに解脱の要を問ひしに彼らが説處未だ終局の真理に非ずとて辭し去ぬ。

●苦行 自ら精練するに如じとて ニレンゼン河の東岸なるガジャ仙苦行林にゆく此

地の樹木の麗しく水清を好してこゝに在りて諸の苦行を修めて正眞の道を證らんとし日に一麻一米を糧とし修すること六年ついに身體つかれ皮骨連立たり一日ニレンゼン河の清流に入て洗浴たるも氣力衰へて自から出ること能はざれば樹の枝によぢて漸く上れりと偶其ほとりなる村の長の女ナンダバラが献く乳糜によりて氣力回復し元の如くなりぬ夫よりは南の方ガヤのヒバラ樹の下なる金剛座上に於て吉祥が施せる處の草を敷て而して結跏趺坐し玉ひ 時に大誓願を發すらく我今正眞の道を覺らずは寧ろ死すとも此座をさらじと。

●降魔 宇宙を全動する心靈の力はついに天魔を驚動したりきたために魔王が衆多の眷屬をひきゐて逼るもボサツは毫も動きたまわす智力を以て魔を降しまた起こと能はざるに至らしむ。

●成道 臘月七日の夜に於て天魔を降して後金剛定に入り初め天眼をえて盡空間を知見し次に宿命を以て時間的に三世を通曉し後夜に明星ほのかに出し時正しく無上覺を成し永く無明の眠りさめ靈の暁とはなりにける。

●轉法輪 已に正覺を成し已て初め華嚴の高談より次で鹿園の五ピクを度しついにネハンの夕に至るまで五十年間の教化は無數百千の人を度し 其思想言語行爲に於て一の缺憾もなく完全なる道徳は一として摸範ならざるなし。

●入涅槃 八十歳の時クシナ國パッタナイ河の邊なるシヤラ林の中に於て二月十五日の夜諸の弟子たちに遺誡して深禪定に入てネハンに歸したまふ

●佛陀不懷 佛陀の教ゆる處の要は人類を攝めてネハンに入しむにありネハンは永恒に變ることなき常世の國なり彼の處の萬物は金銀珠寶を以て莊嚴られ光明永に輝き光榮と幸福に充ざる故に極樂とも名づく 釋尊法華に曰く我人中に生れガヤに正覺を得たるは方便の身に於て眞實の法身は無量光壽にて永遠に滅せずよしや衆生は時ありて滅すとも淨き國は常に安穩にして天人常に充滿し園林諸の堂閣は種々の寶を以て莊嚴れり 如來は衆生を此常樂の處に誘はん爲に分身を示し世に出たる

なり。

●勸結 問。如來は曰へり三界は吾有其中の衆生我子なりと我共は一大法身を源としながら肉のために煩惱に覆はれて眞の父と永く隔たれり何なる方法に依てこれが調和を得べきぞ答。聖典に一心に如來を見と欲してシヤカの本體たる三身一如のアミダの聖號によりて聖意の現はれを念じて止ざる時は三昧定中に如來の靈應を感し佛知見開け而して意象一轉して心靈更生り聖き靈と成りていと福の生活をとげ肉體は變らざれとも神は淨界に栖あそび此依身を脱る時は實在の常樂世界に生れて三身一如の如來を見上りて無上の理をさとり聖菩提の道を成せんシヤカ出世の聖意こゝにあり。

三六

一心十界の頌

5 6 6 6	6 1̇ 6 5	6 1̇ 2̇ 6	54-0
あつめち	よろづの	ものはみ	な
5 5 2 2	5 5 6 1̇ 6	4 4 5-2	2-0
ほつしん	によら一い	ぞうせう	の

ハ 調 四 分 四

三七

一心十界の頌

佛 陀 禪 那

三八

天	人	修	畜	餓	地	一	一
上	問	羅	生	鬼	獄	心	大
仁義禮智のみちありて 義務は國家の目的にとて	おのれ慢ぶり侘を威し 天を畏れず世をなみし	正なる人道を横さまに	形は人類に似たれども 正なる人道を横さまに	有財無財の餓鬼てふは たからと五慾を貪りて	地獄は倒に懸りては 人道に逆ひ理に戻り	たとはば巧な畫き師が 六凡四聖とかはれるも	一大精神 天地よろづの物はみな 發現なりと識るときは
社交は互ひに怨やり 力を竭すは人なれや	驕る阿修羅のかほにくし	情操は禽かは獸かは 歩行衛はいづこそや	肉食我慾の弊証にて 重き罪惡造るより	たけき炎に焦るゝは 殘酷非道の報ひとや	さまゝすがたを繪す如く ひとつ心や造るなれ	法身如來藏性の 人の心性根底ぞ深し	

三九

博く愛して人類の爲
世に幸福を興ふるは

我を犠牲に献げては
國つ神かや天人か

聲

聞
小聖は四諦の理を觀し
神通自つと具はりて

無我は宇宙を身となせば
無爲の都に栖あそぶ

緣

覺
獨りしづかに座を占て
無明生死の夢さめて

因緣無常の理をさとり
緣覺涅槃に入ぬらめ

菩

薩
ぼさつは誓の海ふかく
一切衆生を我身とす

菩提を求め衆生を度し
同體大悲の極みなれ

佛

陀
佛陀は三身まどかにて
智慧やあまねく照しては

法身在さぬ處もなく
八相應化のあと高し

勸

結
無明は六のやみぢなり
九界にかゝる雲はれて

覺醒れば一如の天清く
本覺如來の日は明し

佛法を外な求めそよ
宇宙一大真我なる
如來の智光に無明さめて
事相は内容かぎりなき
斯る真理を得てよりは
最終真理の目的に

己がこゝろの源との
無量光壽に歸命せば
天真自性は顯はるれ
萬の功德は與へらる
大我の中の我として
參はり天職を力めかし

一心十界の頌の解説

佛陀禪那

一大精神 佛教にては宇宙眞體は一大精神であると説く天地萬物統一綜合たる精神なれば總該萬有心と云ひ亦は法身如來藏性とも稱す世界萬物 十界の身心は悉く此一大精神の發現である此に全知全能の徳用あり天則秩序を整ふるは知の作用にて萬物を生活活動せるは能の作用と云ひます 宇宙の實體の方は如來の自體にて永恒不變ので現象の方面は生滅轉變極りないのである一大精神より發現れたる個々の精神を二に分て凡と聖とす凡は無明にて之を六凡とし聖は覺醒たる心靈にて四聖である此十界は一大精神より現はれとすれば人の精神の根底は玄深であります

一心十界を造る 一大精神の分れたる個々の心は理に十界を具し事に十界を造ると申し十界とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道と聲聞緣覺菩薩佛陀の四聖とを併せたので人の心は十界何れにも成るべき性能を有て而して因縁の事情によりて善惡の十界を造り出すことは喻は巧なる畫師が天人をも鬼をも自由に描き現すようなものである

一つ心か善惡に分るゝ因縁に就ては形と業識との両面がある先づ形の方から説明ませは無垢の本性が何して善惡に變化と云はば其本性が父母の素質の黨染を稟け、また妊娠中の母の心の持方のいかゞに於ても其子の素性に關係を及ぼす夫より出生後には少年の時の家庭學校社會の教育其佗の周圍の事情は其人を善惡に醇化する資縁であるさて夫よりは最も其人々に責任の重きは一生の業作と善惡の習慣性とである其習慣性が鞏固して決定たるを業識と申し善惡六道と四聖と分るゝは習慣性の業力の結果であります カントが天國は理論には無とも有とも證明はできないが其實行の結果はなくてはならぬと云と同じく地獄や天堂は之を理論に證することは能はざるも人の生涯の善惡の業によりて固りたる性格と其業力の自然は六道四聖なければならぬ否現に個個の情操と其行爲は六道の瞭然と證明されてるではないか、さて此十界は凡と聖と善と惡と其相に於ては清濁相異なれりと雖ども其本一心の造る處と申す

地獄 闇黒の中に於て其身は倒に懸り熾然な猛火に焚焼れ劇苦に間隙なきものは地獄と申す、何なる業力により斯る惱苦を感ずるとならば一類の人あり唯悪の方のみ發達し良心滅亡し悪の習慣性が惡弊症に陥り天理に逆ひ人道に戻り殘忍酷薄極惡の所作者をして戦しむ上にありて般の村が己が肉の快樂の爲に民を塗炭に苦ましむが如き下にありては盜跡が數多の人の幸福を一個の肉慾の犠牲となす斯の如きのすべて邪惡の習慣たる業譴惡の業力が感ずる處を地獄と申します

餓鬼 此に二種あり一に有財餓鬼とは眼前に食物あるも其喉小くして之を食すること能はず飢渴の苦の甚だしきものであると申す世に我慾の病的に陥り山の如くに財を積めども之を公益に施すこと能はず我慾を充しめんが爲に他に害を與へ我慾の餓鬼根性のかたまりなる業識が感ずるところをかく申します

無財餓鬼とは一切の食物を見ることさへ能はずして常に飢渴の苦を受くるもの世に一類の輩あり縱逸にして活業を營まず飲食に耽り色に荒み奢淫放逸肉慾の奴隸となる凡て感覺の欲が一定の快樂を屢すれば習慣となりついに病的となれば既に生ながら肉慾の餓鬼の業識と成りしと云も敢て不可ではない世に食色慾等の惡弊症に陥りたる人はいふよしや死するも此こと計りは禁ずるに堪ず是肉慾餓鬼の性格ではないか

畜生 いか成るものが是畜生の業識と申すとならば人生を營養生殖の外に目的あるを知らず道徳倫理もなく人と交りて仁慈もなく義務感情もなく横的情操横的行爲形は人類なれども其情操と行爲は動物に異ならず世の所謂の人間獸心なるものなり 暴行虎の如きあり淫沃禽に類するあり既に人類に進化たる甲斐なく自ら性を畜生に安ずるは寔に淺ましではありませぬか 上の三類は惡の性格と行爲の等によりて三品に分ちて之を三惡道と名づく

修羅 無明の中に善なるもの三品あり中に下品なるものは修羅と云ひます人にして修羅的性格なる者とは世に云ゆる天狗根性傲慢を以て其全精神を支配せるので經に慘賊鬪亂誠實なく尊貴自大にして己道ありと謂ふて横に威勢を行し人を侵易め自ら擧高

して人の敬難を欲み天道を畏れず實に降伏すべきこと難し彼偽善偽徳を以て名を釣り權威を迫り求め傲慢の爲の故に心に諍闘休止なく斯る性格を修羅業識と名づく

人道 人には仁義の常あり君臣父子等の經綸あり同情仁恕を以て相互に社交を濃にし良心あり義務感情あり個人は國家の一員なりと其職務を重じて人たるの義務を盡し天職を全ふするは即ちこれ實の人なり全く人たるの義務を盡す時人たるの權利を失ふことなし即ち是因果の理であります

天道 天は公明正大博愛無私萬物を一仁の下に攝む世に仁人君子あり國家人類の爲に己を犠牲にして世に幸福を施せるもの皇國の仁徳帝の如き支那の堯舜禹王の類全く國民を子とし愛撫したまひたることは是らは宜しく天道に配すべし或は電氣または蒸氣等を發明して天の機能を人類に紹介せしもの如きは天使の作用なりまた楠公清磨の如き國つ神と祀らる如き人類の常倫に超たる天道に屬するのであります已上三類は善の行爲の三等によりて三善道と申す

聲聞 先覺者の軌則に隨て得道するものを聲聞と云ふ四諦とは苦集滅道にして苦とは生死は業に縛れたるの苦なりその本は煩惱である煩惱の本は即ち主我である我を無にせる無我は宇宙真我と一體となりたるのである即ち天地同根となれば自然に神通を得て遠隔の地を見聞し他人の心を知り未來を豫言することをう自尊心と宇宙の内容は一致してあれば心靈は無爲涅槃界に逍遙び而して肉體盡る時は一如の眞理に皈入す釋尊の弟子舍利弗目連の如き聖者は悉くこれに攝す

緣覺 また獨覺とも云ひて獨り無師自然に悟る聖者である十二因縁を觀して生死の源を悟り涅槃を得る生死の源は無明である之を覺れば業失ふ業力失へば生を受る勢力なし生せざれば老病死なし己に生死を脱すれば宇宙と一體である涅槃常樂の都である之を緣覺と云ふ今古哲學者の如きは萬物の原因結果の理を究む即ち緣覺の學者といふべし聲縁の二聖は獨り自己の解脱を期して利他を兼す

菩薩 智仁兼具り自ら替て人を救ふ聖者なり智慧ありて宇宙の玄妙の理を契悟仁愛

ありて宇宙的同情を以て人類を擔ふて度するに衆生の苦を我苦とし人を度せずば我も成佛せじとの情操と實行となり釋尊の未だ正覺を得たまはざりし時またキリスト。マホメットの類孔子ソクラテースの如き善導達摩の類吾國の空海源空等の聖者は悉く菩薩とす。すべて心靈更生して永恆の生命となりて人類を誘導する勇健なる仁人はみな之に屬す

佛陀 前の菩薩の因位圓かに果成を佛陀と名づく法身報身應身の三身あり此世に出て釋尊として人格の身を以て人類を教化度脱し玉ひしは應身と云ひ最高等の清き處に在して相好圓滿の身光明遍く十方を照して一切の人類を攝取し靈化し玉ふを報身と云ひ天地萬物の實體として一大精神態にして萬物を現出する本源なるは法身である佛陀は人類に對しては人の身なれども内面は宇宙の内面と一體に在せり 己上四聖は聖靈態精神にして即靈格なり

勸結 一心の發現たる十界の中にして無明なるものは六凡にして冥々として流轉し心靈覺醒たるものは聖者にして宇宙心と冥合して涅槃界に安立し前三聖は覺醒たるも未だ圓滿ではない獨り佛陀のみ全く宇宙と一體にして一方には極樂に安住してまた一面は分身を以て世界に出て度脱の作用をなすのである。

宗教の眞理は何の點にあるやと云は各自の精神と其本源なる宇宙精神との調和するにあり自己が小天地の小我とすれば宇宙は大我である此大我と小我が融合して大我の目的を我目的として眞理の終局に進むべき力行をなすが宗教の目的である其大我の眞面目を悟りしは即ち教祖釋尊である否悟りしのみならず全く大我の化現である。

釋尊は其大我を「アマミダ」と名くと曰へり譯すれば無量の光と永恆の壽の義即ち宇宙の眞體にしてまた一切心靈を開發し靈化するの靈能なり問ふ何なる法を以て大我小我の調和を得べきや答て佛敎に其方法多しと雖ども最も簡易にして完全に調和をうるは佛陀三昧なり佛陀三昧とは大我なるアマミダの聖名によりて其聖旨の我に現はれんことを祈りなば早晚如來の靈應が自己の心靈に感じこの一點の靈光に由て心靈の覺醒と

なる心靈開發すれば自己の心は全く如來の天真自性の中なることを悟る進んでは如來の内容なる金銀摩尼寶珠の宮殿七寶の莊嚴に最とも威嚴巍巍たる相好の如來に神聖正義智慧慈悲等の萬德を以て嚴臨玉ふことを啓示する爰に至て始て完全たる宗教の關係を成したりと云ひます。

かゝる眞理を得てよりは宇宙の心を我心とし宇宙の眞理に參與りて得たる眞理を實踐躬行するが宗教の本旨にて而かも宇宙の目的に加はりたるものであります。

大正十三年二月二十三日印刷同月二十五日發行

誌代年七冊壹圓貳拾錢 年十二冊貳圓

編輯兼發行人 山崎 辨 成

印刷人 東京市小石川區茗荷谷町三十七番地 土屋 六 郎

發行所 東京市小石川區水道端二丁目四十四番地 ミオヤのひかり社

振替東京四九三三八番